



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	毛皮を奪われた女 : あざらし女民話の変奏としてのジョー・ホールドマン『擬態－カムフラージュ』
Author(s)	下楠, 昌哉
Citation	層 : 映像と表現, 11, 4-29
Issue Date	2019-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/88021
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73514
Type	departmental bulletin paper
File Information	kegawa.pdf



毛皮を奪われた女

——あざらし女民話の変奏としてのジヨール・ホールドマン

『擬態——カムフラージュ』

下楠 昌哉

プロローグ

ロバート・カラン（談）／ヨーロッパ・ホテル、ベルファスト／下楠昌哉（記）／二〇〇七年七月十八日

北アイルランドで唯一港のある島、ラスリン島に伝わるひどくありふれた話だ。何人もの人から同じような話を聞いた。島のマカーティという一族が、マーメードの子孫だと言われている。イングリッドではマーメードというと半人半魚だが、俺た

ちケルトの地域では完全な人の姿をしている。すなわち
シール・ウーマン
あざらし女というわけだ。

あざらし女は夜になると浜辺にやって来て、外套を脱ぎ棄て、人の姿になって海で泳ぐ。外套にはフードがついていて、それをかぶればあざらしだ。ある時、あざらし女が泳いでいるのを目にした漁師がその外套を盗み、家の屋根を葺いている草の中に隠した。外套を盗まれたのに気づいた女は、自分の服がないと海に帰れないから返してくれと漁師に頼んだが、漁師は女を自分の家に誘い、結婚してくれと頼んだ。二人は結婚して子ど

もを三、四人もうけた。

女がマーメードであるのは周りの目には明らかだった。びっくりするほど偏平足で、教会に行かない。そして魚が大好きだったからだ。

漁師が漁に出たある晩、嵐が吹き荒れ、漁師の帰りは遅くなった。女は家の裏手の屋根が風で飛ばされないか心配になり、上にのぼって調べてみた。そして葺いてある草の下に、自分の外套を見つけた。

漁師が家に帰ると家のドアは嵐の海に向かって開け放たれ、子どもたちだけが残されていた。

このように現代でも取り立てて珍しくもない話として語られるあざらし女の民話は、もともとは身勝手なあざらし殺しの男たちによって語り伝えられてきた。本物のシール・キラーがそうした物語を語る現場にぎりぎりのタイミングで居合わせ、語り手たちの姿と物語を記したのが、スコットランド人の両親を持ち、インド生まれの作家にしてラジオ番組プロデューサー、デイヴィッド・トムスンである。一九四〇年代、彼はスコットランドの島嶼部とアイルランドの辺境を巡り、あざらし人間たちの民話の語り手を訪ね歩いて、『海の民―あざらしの民のケルト民話』（一九五四）と題した民話紀行をものした。トムス

ンの書物は学術的な作法に則って民話を書き記したのではないが、鋭い観察眼と自分が描く対象への愛情に溢れた彼の著作には、民話を実際に語られる有様が活き活きと描き出されている。

筆者自身が聞き取りをした先のカラン氏の物語では「人魚」の意味にあたるマーメードという言葉が使われているが、一般にあざらし人間たちは「セルキー」と呼ばれる。その民話の本場は、シェトランド諸島やオークニー諸島といったスコットランド北方の島嶼部である。ただし、冒頭に物語がそうであるように、あざらし女の民話はアイルランドでもよく見られる。アイルランドでは民話収集が自国の文化的伝統を強固にする役割を担ってきた側面があり、アイルランド民話はイギリス民話と分けて扱われがちである。しかし自称「シール・マニア」のトムスンには、そうしたこだわりは無縁だ。彼は言う。「嘘だとか本当だとか、そういう風に自分が聞く物語のことを考えない。僕はそれを聞くのが好きなんだ。それだけさ」こうした彼の屈託のなさは、国境を軽々と越え、スコットランドもアイルランドも分け隔てなくあざらしにまつわる民話を収集することを可能にし、イギリス諸島の北の端から北西部にかけて、共通の口承文化地帯があることを露にしてくれる。そうした地域では時に物語が英語ではなくゲール語によって語られ、長らく「ケル

トの「文化とみなされてきた。

トムスンにあざらしの物語を実際に語って聞かせるのは、ほとんどが男である。そのなかには、あざらしを実際に殺したところのある男たちもいる。毛皮と油をとるためのあざらし狩りは、トムスンが民話を集めたころにはすでに廃れてしまっていたが、シール・キラの末裔であることを自覚している男たちは、一九四〇年代にはまだ多く残っていた。しぜん、あざらしを殺したことがある男たちの物語には、毛皮と狩りに関するものが多くなっている。冒頭の物語も、その祖形となる古い話では、あざらし女が奪われるのは衣服ではなくて毛皮である。そして、あざらし女たちは、人間の男たちの身勝手さに振り回される。トムスンが集めた話のなかには、あざらし殺しの男たちにとつてあまりに都合のよいこんな話もある。

アイルランドからのキリスト教伝道師にちなんで「パパ・ストウル」、すなわち偉大なる聖職者と名づけられたシェトランド諸島の本島の西にある島には、むかし、あざらし狩りが行われていた岩礁がある。あるとき、男たちはあざらし狩りをすべくその岩礁に上陸し、あざらしを撲殺して毛皮を剥いだ。すると、突然大波が岩礁を襲った。一行は慌てて船に乗り込み、難を逃れた。

ただひとりを除いては。

船は男を置き去りにして帰ってしまった。あざらしたちは日暮れ前に岩礁に戻つてくると、殺されて毛皮を奪われた仲間のために嘆き悲しみだした。その哀しみの斉唱の中で、男は寒さとひもじさに震え、絶望した。あざらしたちは男がいるのに気づき、泣き叫ぶのを止めた。すると、ゲイラという名の雌の^{セルキー}あざらしが男に、パパ・ストウルに送つてやろうと申し出た。その代わり、毛皮を失つて海の底に帰れなくなっている息子のハンシーのために毛皮を取り戻してくれ、と頼んだ。

男はあざらしの毛皮が濡れて滑るのを恐れて逡巡し、自分がしつかりつかまれるように彼女の毛皮に穴を四つ開けてよいならば、背中に乗つて荒海に乗り出してもよい、と提案した。ゲイラはその提案を承諾し、男は無事あざらしの背に乗つて島に帰った。

こうした民話において、セルキーたちは、あざらし漁を止めるようにせまることがあるものの、おおむねあきれるぐらい仲間を殺す漁師たちに寛容である。イギリス民俗学の第一人者キャサリン・ブリッグズは『イギリスの妖精』において、「どんなにいいじめられても復讐をしようとしないうあざらしの妖精」は「心が広い」（石井美樹子・山内玲子訳）と述べている。あ

ざらしの妖精の心が広いかどうかの真贋はともかく、確かなのは、このタイプの民話が古くはあざらしを殺した男たちあるいはその末裔の男たちによって語られ、その内容が彼らや彼らの祖先にとつて、きわめて虫のいい話になっているということなのである。

トムスンが、かつてあざらしを殺した経験を持つパバ・ストウールの老人のこの話に耳を傾ける間、老人の妻は、こうしたばかげた話に耳を傾けないように、とトムスンに何度も忠告する。トムスンの紀行文において物語が語られる現場の描写は、ノンフィクションのそれに近い。あざらしの民話が語られる現場で、トムスンが記録した限りではほとんどの場合、女性は物語の進行を妨げる存在として立ち現れる。あざらしの民話は、男が語るものだったのだ。

序

一九四三年にアメリカはオクラホマで生を受けたジョー・ホールドマンは、ベトナム戦争従軍後に作家デビューした。一九七五年の『終わりになき戦い』でSF作家の第一人者としての地位を確立し、現在でも息長く一線で活躍している。そのホールドマンが二〇〇四年に出版した『擬態―カムフラージュ』は、

海底から発見された百万年前の人工物と、長らく地球に潜伏してきた異星人と人類とのファーストコンタクトを扱った作品で、ネビュラ賞とジェイムズ・ティプトリー・Jr.記念賞を受賞した本論では、スコットランド島嶼部やアイルランド沿岸によくみられるあざらし人間のセルキー、特にあざらし女にまつわる民話の骨子の部分が、ホールドマンの『擬態』の物語構造の中枢を支えているのを明らかにする。また、ホールドマンが意図的に民話のモチーフを作品全体に散りばめている様子についても検証する。

『擬態』は、あざらしそのものは出てこないものの、これに先行する様々なあざらし女のモチーフの民話、小説、映画などの系譜に位置づけることが可能な作品である。そこで、ホールドマンの作品が連なるあざらし女のモチーフを持つ作品群と『擬態』を比較検証することを、本論の二つ目の狙いとした。そしてその際に注目するのが、あざらし女の物語を語る者たちのジェンダーの問題である。あざらし女をモチーフにした文学・芸術作品に関する包括的な研究の存在は未見であるので、本論では筆者の管見に入った作品を恣意的に扱うことになる。しかしながら、限られた例ではあるが、ホールドマンの作品が連なる様々なあざらし女の物語を見てゆく過程で、もともと男性漁師たちによって語られていたこのタイプの物語が女性、あ

るいは女性性を強く意識する作家たちに篡奪される様子や、さらにはそのような作家たちによって語り直された物語の中で、登場人物たちの役割に割り振られるジェンダーが激しく入れ替わる様子を目にするができるだろう。

マツチヨなSF大御所ホルドマンが執筆した『擬態』は、「女性にやさしくない」描写が散見される作品である。にもかかわらず、世界で唯一のフェミニズム志向のSFコンヴェンション、WisConから生まれ、ジェンダーに関する理解を探索もしくは拡張したSFあるいはファンタジーに与えられるティプトリーJr記念賞を二〇〇四年に受賞した。もちろん、受賞理由は賞の選者たちの選評で言い尽くされているわけだが、本論が後に明らかにするように、『擬態』があざらし女、すなわち長らくジェンダー間で争奪戦が展開されてきたモチーフを持つ作品であることを考え合わせると、この作品がティプトリーJr記念賞を受賞した意義をさらに高く評価するのが可能になるのではないかと思われる。また、セクシュアリティに関する諸問題をホルドマンが作家としてのキャリアを通じて探求していることは、本論でも確認しておきたい。ホルドマンが人間の性に対して絶えざる興味を持ち続けているからこそ、あざらし女の民話が、少なくともその物語構造の骨子の部分が、彼の心に留まったのであろうから。

1

初めに『擬態』の内容を、本論の論旨に必要な部分に焦点を当てながらまとめてみる。この作品は、二〇一九年から二〇年の物語を軸として、一九三〇年代前半から始まる物語が交互に並べられ、やがて後者が前者に追いついてゆく形式が取られている。しかし、本編の前に付されたプロローグに年号は付されていない。その必要がないからだ。このプロローグでいきなり読者は百万年の昔に一万光年の彼方から「怪物」が地球にやって来ていたことを告げられる。過酷な環境を生き抜いた「それ」は、「けっして死ぬことのない存在」になっていた。不死の存在に時間の流れは関係ない。海中深く身を潜めた宇宙船の中から、やがてその怪物は自分の一部を海の食物連鎖の頂点にあるホオジロザメの姿をとらせて外界の探索に出す。ところがあまりに長い時間、海をさまよった「それ」は、自分が外に出た理由と宇宙船の中に残した本体の存在を忘れてしまう。物語は、二〇一九年に人間たちが怪物の宇宙船を海底に発見した時と、一九三一年にカルフォニア州の海岸に「それ」が人間の姿をとって上陸した時に始まる。本編が始まるや、地の文において「それ」は「チェンジリング変わり子」と呼ばれ出す。

二〇一九年に百万年前の人工物、すなわちオーパーツとして

発見された宇宙船はサモア島に引揚げられ、その正体を暴くため、様々な試みがなされる。サモア島で引き揚げと調査の中心となるのは、海洋資源や開発に携わるポセイドン・プロジェクトという小規模の会社を経営し、自らも現役のエンジニアであるラッセル・サットン。彼は、この話をアメリカ海軍提督ジャック・ハリバートンから持ちかけられる。ハリバートンはこのプロジェクトが始動するや海軍から退役し、パトロンとして調査を支える。

一方、一九三一年から始まる物語では、〈変わり子〉は上陸して最初に出会った少年ジム・ペリーを殺してその姿を奪い、精神に異常を来たした病人を装いながら徐々に人間社会に適応してゆく。大学に進学した後、第二次世界大戦で軍役について、フィリピンで日本軍の捕虜となる。そこで「何度か」殺された〈変わり子〉はジミーのアイデンティティをあきらめ、いくつかの人格を経てからハワイ大学で海洋学教授の職を得る。

サモア島での引き揚げ調査の報道を目にした〈変わり子〉は、それが自分のような地球における「超自然的」存在に係るものであることを察する。〈変わり子〉は、若い女性事務員として、サモア島でのプロジェクトに潜り込むことに成功する。そして、八十年を越える人間としての生活は、「彼女」がラッセルと心を通わすことを可能にする。ところがそこに邪魔が入

る。〈変わり子〉とは別種の不死の存在である、「カメレオン」とテクストで称される異星人がサモアのオーパーツに目をつけていたからだ。紀元前以前から人の姿をとり、絶えず殺し合いがあるところに身をおいていた好戦的な「カメレオン」と、物語の最後で「変わり子」は対決の時を迎えることとなる。

2

続いて、『擬態』における民話モチーフそのものの扱われ方について論じる。この論考では『擬態』の物語構造を支える民話としてあざらし女に関する民話を取りあげてゆくわけだが、民話に限らず伝説や神話、あるいは古今の名作を下敷きにして新しい作品が生み出されるのは珍しいことではない。というより文学の歴史を顧みれば、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシイズ』ではないが、ほとんどの作品がその集団に属することになるだろう。また、表面上は個別の作品のプロットが物語の下部構造を支えているように見えなくとも、物語の贅肉をぎりぎりのところまでそぎ落としてみれば、ほとんどの小説や映像作品の基盤から、聖書の中の一エピソードやエディプス・コンプレックスが顔を出す。そうした作品と比べてみると、『擬態』はイギリス諸島の民話を意識して書かれていることを、物語の

かなり早い段階からテキストの中で明らかにする。そこには、物語の枠組みとして民話を換骨奪胎することにプラスした、作者の意図が感じられる。

現代SFにおいては、現代あるいは未来の人間社会の中に、妖精や伝説の怪物などの超自然的存在を、読者にある程度納得できるかたちで提示しようと作者が試みることがある。例えば、ポール・J・マコーリイの『フェアリー・ランド』（一九九五）では、妖精が^{フェアリー}この世に現れてから人々に忘却されて伝説上の存在になるまでが語られている。近未来のヨーロッパでは、人間の下僕となるドールという一種のロボットが遺伝子の改変によって造られていた。ところが、ドールに知性を与えて人類に対して反乱を起こさるべく活動を起こす人物が現れ、知性を得たドールは「フェアリー」となり、人類に対して闘争を開始する。この作品は間違いなくSFだが、モダン・ファンタジーに定番の三部構成をとり、『フェアリー・ランド』という呼称と合わせて、おとぎ話を下敷きにしたファンタジー作品を意識していることを前面に押し出している。『フェアリー・ランド』には、人間の記憶を改変できるナノテクノロジ^{すい}ーの粋を集めた「フェムボット」なる超小型ロボットが登場する。フェアリーと人間の争いが一段落した後、このロボットに影響された人類の記憶の行く末が、物語のエンディングの直前に語られる。

「新しいミーム疫病が人間のあいだに広まり、彼らは忘れていくだろう。フェアリーは伝説やお話にすぎなくなり、ビッグフットなどの目撃談と同じようなものに分類されて、ウェブの片隅に細々と残るだけになる。フェアリーは未解決の謎となり、夢の中でちらりと見るだけのもの、現実の人生には関係のないものになるのだ」（嶋田洋一訳、六七八頁）。どのようなかたちであれ、現世での妖精のあり方にこれだけ首尾一貫した「説明を付けた」例は、民俗学の研究書を含めてもそうはあるまい。

一方、ホールドマンは、『擬態』の中で民話や伝説の世界の超自然的存在を、どのように扱っているのだろうか。マコーリイは、民話や伝説の中の超自然的存在を説得力あるかたちでSF的言説の中に描き出してみせたが、ホールドマンはそれとは逆に、ひとつ間違えば荒唐無稽に取られかねない作品設定に信憑性を与えるがために、超自然的存在に対して使われてきた語句を巧みに利用しているように見える。そもそもこの作品は、「その怪物は、(The monster)」と^う一言から始まる。海の中に潜む怪物というのは昔から物語の聴き手、読み手たちの血を沸き立たせてきた題材ではあるが、話の展開次第によっては子どもだましになりかねない。たとえどれだけ海洋工学や海洋生物学に関する精緻な言説を積み重ねたとしても、である。やがてこの「怪物」は、それ^をと呼ばれるようになり、第二

章になって本編が始まると何の前触れも説明もなく、テクスト内で「^{チェンジリング}変わり子」と呼ばれるようになる。チェンジリングとは、民話の世界で「取り替え子」という妖精を表す言葉である。このタイプの民話では、人間の赤ん坊が醜い妖精の子どもと取り替えられたり、妊婦や新婚の女性が妖精の世界に連れ去られたりする。「取り替え子」の民話は世界のいたるところにある民話であるが、アイルランドのノーベル賞詩人W・B・イエイツが自ら収集したり、詩の題材としたことで有名で、そのためアイルランド民話としてのイメージが強い。『擬態』において、^{changeling}「^{チェンジリング}変わり子」と訳されている。生物はもちろん無機質の物体にも変じることのできるこの「怪物」の特性を鑑みた、訳者金子司の渾身の訳語である。さらに、この訳語に「チェンジリング」というルビを付されているのが重要である。これにより日本語翻訳の読者も、作者ホルドマンが「取り替え子」という妖精を意味する単語をこの「怪物」に付していることを、容易に感知できるからである。

この「怪物」は最初に出会った青年を殺してその姿を奪い、青年の自宅で赤ん坊のように世話をしてもらうようになる。この点において、「取り替え子／チェンジリング」の民話に重なることは間違いないが、取り替え子の民話を念頭に置いた場合、この作品では重要な部分が抜けている。失われた人間の子ども

は、妖精世界から取り戻されはしないからである。取り替え子民話のイメージは怪物に対する呼称だけを残して、物語が進行するに従って薄れてゆく。しかし、「チェンジリング」というこの呼称は、読者に常に妖精の民話を意識させ続ける一定の効果を、物語を通じて保証し続ける。

「チェンジリング／変わり子」のライバルとなる「カメレオン」は、記憶がないくらい昔から人間社会に不死者として生き戦いを好むがゆえに何度となく殺され、灰になるまで焼かれたこともある。そして「カメレオン」が引き起こしたいくつかの事件は、「おそらくはヴァンパイア伝説が生まれる機縁（七八頁）³」となった、とされている。古くから言い伝えられる民話や伝説の中に登場する超自然的な存在は、現実の人間社会に潜伏して暮らしている未知の生物の姿をとらえたものではないのか、というこの設定は、主人公の怪物が「チェンジリング」と呼ばれていることと同じ効果を生む。つまり、現在の人間科学では到底考えられない「超自然」的怪物が現実存在しうる可能性を読者に納得させるのである。

3

『擬態』の中で「取り替え子」民話が後退してゆくに従って、

深海から現れるかのようにその存在感を示してくるのが、あざらし女の民話である。『擬態』のテクストとその民話の関係を論じる前に、あざらし女、あるいはあざらし人間に関するイギリス諸島に見られる民話について、本論のプロログで触れていない部分を中心にとめておこう。民話に関する参考図書においては、このあざらしと人間が深く交わる民話は「あざらし人間」もしくは「あざらしひと」の物語と称されることが多い。しかしながら、キャサリン・ブリッグズによる『英語による英国民話事典』（一九七〇）でインデックスに示されている民話のタイプでは、あざらしに関する民話は「あざらし女（The Seal Woman）」と「傷ついたあざらし（The Wounded Seal）」とされている。本論の趣旨にはこちらの分類のほうが合致するところが多いので、ブリッグズが取りあげた「あざらし女の民話」の類型を手がかりに論を進める。ブリッグズの事典に例として取りあげられているあざらしの民話は、ほとんどがオークニー諸島もしくはシェトランド諸島のものである。これらスコットランド本土の北に位置する島嶼部では、国家間の領土争いに翻弄された複雑な歴史的背景がある。ここで、その島々の住人たちに本土と同一視されるのを忌避する傾向があることは指摘しておくべきであろう。冒頭のカラン氏の話の中では、イングランドとそれ以外のケルトという図式になっていたが、こ

のタイプの民話について考えるにあたっては、スコットランド本土と島嶼部を分けて捉える視点が必要となるのである。

「あざらし女」の民話の例に関しては、冒頭ですでに二つの例を挙げた。美しいあざらし女が毛皮を取りあげられて人間の妻になる話と、荒海を渡って陸地に男を送り届ける話である。これら二つのタイプの民話に見られる共通点は、あざらし女がおそろしく寛容で従順であること、男に陵辱されること、の二点である。（荒海を渡って男を送り届ける話では、毛皮にナイフで穴を開けてそこに手足を挿入するというくだりがある。先が尖って武器でもあるナイフは、呪術・民話・フィクションなどにおいて男根を象徴するものとしてひんばんに用いられる。子孫繁栄を願うウェディングケーキへのナイフの入刀などが、身近な例として挙げられよう。）なおブリッグズは、「人魚」を「あざらし女」の民話の類型として分類している。これは、冒頭で筆者が聞き取りをした物語において人魚とあざらし女が混同されていることに、ひとつの説明を与える。

そして、民話を学術的に分析するレベルでさえ「人魚」を「あざらし女」の一変換形態とみなすことが許されるのであれば、たとえあざらしそのものが登場しなくとも、『擬態』の物語構造に「あざらし女」がカムフラージュされている可能性を考えて論を進めることは許されよう。確かに、日本の天の羽

衣の話に見られるように世界中で似たような話は存在するのだが、異星人側の主人公が「チェンジリング」と名づけられているように、ホールドマンがイギリス諸島の民話を強く意識しながらこの作品を執筆したのは間違いないからである。この点については次節でももう少し細かく論じる。

『擬態』とあざらし女が持つ物語パターンの大きな共通点は、人間側の主人公（男性）のオーパーツ調査隊のリーダーの一人であるラッセルが、海から上がって来た人間界とは別個の、しかしセルキーたちのように人間の姿をとった存在（最終的には女性）と結ばれる点である。しかもその怪物は、異界の女でありながらも人間の男の愛情を受け入れられるように徐々にその心のうちを変じ、人間世界に順応してゆく。

さらに注目すべきは、〈変わり子〉が故郷に帰るための必須のアイテム、すなわちあざらし女の毛皮もしくは衣類にあたる宇宙船を、よそでふらふらしている間に人間に発見されてしまう点である。〈変わり子〉はメディアの報道によってその事実を知り、最初はその物体が何なのかはつきり悟っていないままですら調査隊に加わり、ラッセルと恋に落ちる。そしてこの異界からの生物は、自らが出奔した宇宙船と交信することに成功し、無事人間に盗まれていた「毛皮」を取り戻して自らの故郷へと帰ってゆく。このエンディングにおいてあざらし女の民話

の典型と異なる点を挙げるならば、異界の女が故郷に帰る鍵を手に入れる直前に別個の超自然的存在から干渉を受けることと人間の男を取り残してゆくのではなく、自らの仲間の一部に変じて異界に連れ去ることであろう。

4

物語の構造を支えるあざらし女の民話以外にも、ホールドマンが民話や伝説における超自然的存在を自作の本当らしさを保証するために積極的に利用していることは、すでに述べた。その他にも『擬態』には、テクストのいたるところにイギリス諸島の民話、あるいはイギリス諸島の辺境部に関する引喻や直接的言及が散りばめられている。それらをここで少し詳しく見ておこう。

ラッセルとハリバートンはアメリカ合衆国政府からの干渉を予想して、オーパーツの引き揚げと調査の場所に独立国であるサモアのアピア島を選ぶ。物語の序盤、彼らがホテルで食事をとろうとすると、「アイリッシュ系のウェイトレス」（六九頁）がサンドイッチを運んでくる。サモアのホテルのアイリッシュ系のウェイトレス！ このちよい役は作品の本筋に全く関係はないし、登場するのもこれつきりである。ホールドマン自身が

どれほど意識していたかは不明だが、ここで作者の筆にイギリス諸島への言及を促す何らかの要因があつたのは間違いない。

丸い卵形のオーパーツとの交信をはかるにあたり、調査チームはその物体の周囲に実験室を作り、物体の一部を採取すべく様々な方法を試みる。しかしその未知の物体に傷ひとつつけられはしないとわかり、高エネルギー破碎レーザーを試すことにする。物体は小さな街の消費エネルギーをまかなえるほどのエネルギーを照射されつつも、そのエネルギーを内部に取り込んでしまう。調査チームがさらに出力を上げようとした時、ついに物体は自ら動き、レーザーを破壊する。

アイルランド民話に造詣が深かつた三人のアイルランド出身の文人、W・B・イェイツ、ラフカディオ・ハーン、ワイルド夫人は、三人が三人とも述べている。目の前にいる赤ん坊が妖精に取り替えられたチェンジリングかどうか見分けるには、炎が一番である、と。暖炉の上で焼こうとしてみれば、妖精は正体をあらわして一目散に逃げてゆく。『擬態』に登場する変わり子／チェンジリングを送り出した宇宙船の反応は、炎に脅かされて正体を暴かれる妖精の姿がほめかされているかのようだ。もつともこちらははるかに高エネルギーのレーザーに曝されたうえに、本当の正体がわかるのはまだまだ先の話なのだが。続いて調査チームは、実験室内に太陽系の様々な惑星や小惑

星などの大気状況を再現し、謎の人工物のご機嫌を取ろうとする。各惑星の過酷な条件を再現する作業は機器類に負担をかけ、部品の交換が必要となり、つかの間の臨時の休息が訪れる。実験室がある浜辺で調査チームは一大宴会を催すが、その場で自然発生的に奏でられるのは「魔可不思議なアイリッシュやウェールズふうの楽曲」（一八三頁）である。物語の筋に、この音楽が奏でられる必然性は全くない。ラッセルと共同研究者のジャンがすぐそばでワインを飲んではいるが、この音楽に関するコメントはゼロ。それでもやはりホールドマンにとってはここで魔可不思議にイギリス諸島を思わせる音楽が奏でられなければならなかったのだろう。

ハワイ大学で男性大学教授として終身教授職^{テニユア}を得ていた（変わり子）^レは、サモアでの「発見」に心動かされ、若い女性の姿を取つてレイ・アーチャーと名乗り、研究技術者としてラッセルとジョンのチームに潜り込む。すでに人間らしい感情を身につけつつあった（変わり子）^レはラッセルと心を通わせ、休息日に二人で山歩きに出かける。そこで彼らは、スコットランド出身の作家ロバート・ルイス・ステイヴンソンが晩年を過ごした邸宅に向かう。

研究チームがこの島を選んだ理由は前述のとおりだが、作者ホールドマンにとっては、おそらくはロバート・ルイス・ス

ティーヴンズンが埋葬されていることも、この島を作品の舞台に選んだ大きな理由であろう。ラッセルと〈変わり子〉はステイヴンズンの邸宅を訪れた後、作家が妻のフアンニと共に埋葬されている場所まで足を伸ばす。その墓碑は、全文がテキストに再現される。〈変わり子〉はこの後、CIAに追い詰められていったん姿を消す。ラッセルは「彼女」にインターネッツを使って呼びかけようと試みるが、その際に彼は、ステイヴンズンの墓碑の一部をメッセージに潜ませる。物語の後半、ステイヴンズンの名前は頻繁にテキストの中に現われて、この南洋の島とイギリス諸島とのつながりをほのめかす。

最後に、舞台となる島そのものについても少し考察してみる。この島では、島の古老たちが今でも古くからの伝統的な仕方では島を統治しており、調査チームの出資者でリーダーでもあるジャック・ハリバートンは、たびたび島の古老たちと話をつけるにでかける。ここは古い民間伝承の知恵が今でも保持されている島なのだ。そして、かつてステイヴンズンはこの島で「ツシタラ」、島の言葉で「物語を紡ぐ人」を意味する名で呼ばれ、敬われていた。このように『擬態』では、イギリス諸島の民話世界を南洋のサモアに投影するべく、細部に様々な仕掛けが施されている。物語構造を支えるあざらしの女の民話をコアとして、そこにこうしたモチーフが縦横に絡まりあっているのであ

る。

5

ジェイムズ・ティプトリーJr.記念賞に値する作品の要件は、我々のジェンダーに関する理解を拡張し、探求したこと、である。すなわち、必ずしも女性よりの視点を持つ必要はない。とはいえ、ティプトリーJr.賞がフェミニズム志向のSFコンヴェンションから生まれたこと、そして人間の歴史において、性を含めて女性が長らく男性からの搾取の対象であったことを考えると、男性中心的な視点をもった作品は、ぶが悪いと推察される。ホールドマンの『擬態』がティプトリーJr.賞を受賞した、という事実がおそらくは多くのSF関係者に軽い驚きを覚えさせたであろうことは、想像に難くない。『擬態』を含めた彼の主要著作を読んで印象に残るのは、執拗に繰り返される女性の肉体に対する暴力的な破壊と凌辱であるからだ。例えば、ホールドマン一九九七年の作『終わりのなき平和』は、「アメリカ人女性が戦闘に参加して殺される話などばかばかしいとして、作品を拒絶したことがある」（中原尚哉訳、六頁）編集者ジョン・W・キャンベルに捧げられているが、ここから彼の作風に対する出版側からのひとつの反応が見て取れるであろう。

戦争を中心テーマとした出世作の『終わりになき戦い』（一九七四）や『終わりになき平和』で女性が災難に遭うのは、設定上仕方がないところがあるとしよう。しかしながら、以下の二作品の事例はどうであろうか。七〇年代の冷戦と核への恐怖の影響色濃い『さらば ふるさとの惑星』（一九八一）の主人公は、地球の軌道上に浮かぶ衛星コロニーから地球を訪れる女性であり、アイルランド系の「オハラ」という名前を持っている（この作品には他にもアイルランドに関する言及が多くみられる）。彼女は地球において、様々な形で凌辱の憂き目に合う。最初の災難はナイフを持った暴漢に襲われることで、彼女は性的被害を受ける前に救出されるのだが、臀部をナイフで刺されてしまう。すでにあざらし女の民話に関して本論で述べているように、ナイフが暗に指し示しているものは明らかで、表象レベルにおいては攻撃者と被害者の間の性的つながりはすでに描き出されている。（実際、オハラは後にこの災難を実質的なレイプとして回想するようになる。）そして作品後半においてはオハラは視姦され、とうとう最後には意識を失ったところで強姦される。もうひとつの事例である『ヘミングウェイごっこ』（一九九〇）では、ヘミングウェイの贋作騒動が並行宇宙世界の混乱とリンクしてゆく。物語のクライマックスで主要女性人物二人は、ショットガンでその肉体を完膚なきまでに破壊される。うちひ

とりは火を噴く棒で下腹部を撃たれることになり、その隠喩は明らかである（ただし、この二人は時間が逆行することにより、助かることにはなる）。

もう一点、肉体系に關して男女が一線を越えるのが非常に早いのも、ホールドマンの作品の特徴といえるかもしれない。作品によつては作品世界の設定によつて、その「一線」すらない場合もある。例えば、『終わりになき戦い』では、軍の女たちは「軍の慣習（と法律）」（六九頁）によつて、男性兵士の誰を相手にしようと気にしない、というヘテロセクシュアルな男たちに非常に都合のよい設定になっている（ただし主人公は、ウラシマ効果で長い年月を生きる過程で異性愛者は異常者扱いされる時代も生きることになり、深く懊悩する）。

では『擬態』ではどうか。この作品において〈変わり子〉はアメリカの健康的な若者になりますが、その行動は人間の振る舞いとしてはあまりに不自然で、精神異常とみなされて自宅で治療を受けることになる。〈変わり子〉は自分が観察した対象の行動を模倣するのに長けているので、ピアノの演奏に才能があるとみなされるようになる。〈変わり子〉は治療のために女性の芸術家に引き合わされるが、その芸術家をレイプしてしまう。〈変わり子〉は看護師に誘惑されて人間との性的な交わりを初めて経験していたが、わずか一度のその性体験を異なる

状況下で、そのまま同じように履行しようとしてしまったのだ。芸術家は恥骨を骨折する大怪我を追う。この展開において、〈変わり子〉にある意味罪はない。それ に対して人間世界の倫理や法律を適用しても意味はないし、そもそもこの段階では、どういう状況で人間が性的に他者を受け入れるのか、〈変わり子〉はまったく理解していないからだ。にもかかわらず、やはりこの展開はどうしても読み手に不快感を生む。精神の病に陥った青年の治療に役かうためにわざわざ遠方から駆けつけた善意の芸術家。彼女の献身的な努力が、見るも無残な踏みこまれ方をするからである。

また、若い女性の姿をとった〈変わり子〉がラッセルといとも簡単に結ばれてしまうところなどは、〈変わり子〉が謎の人工物調査チームに食い込むという意図を持ち、その後ラッセルに特別な感情を抱くようになっていた、という点を鑑みても、あまりに男性にとつての欲望充足的と読まれても仕方がない急展開の仕方をする。前述のように、〈変わり子〉はラッセルといっしょにステイヴンスンの邸宅と墓を訪れるが、その後は間髪いれずホテル行きである。さらに〈変わり子〉は、CIAに追い詰められて一度正体を暴かれてしまったために、姿を変えてラッセルに二度目の接近をする。その際、誘惑する意図があるにせよ、自らに慎重にと言いつながらに、またし

てもひどくあつさりと一線を越えてしまう。

とはいえ、ティプトリリーJr.記念賞に値する作品の要件、すなわち我々のジェンダーに関する理解を拡張し探求したこと、にもう一度立ち返るならば、ホールドマンが三十年以上の作家としてのキャリアにおいて性的問題を追求し続けてきたのは、日本に紹介されている作品を見るだけでもはつきりしている。『擬態』には、ホールドマンの作品群で探求され続けてきたテーマとして、戦争の悲惨さと不毛さや、人間一個人の存在をはるかに超えた時間の流れなどの主題と並んで、セクシュアリティに関する諸問題に関する探究も盛り込まれている。コンパクトにまとまった作品である『擬態』は、そうしたテーマを集成した作品とは言えないが、そのキャリアにおいて欠かさずジェンダーや性的問題を扱ってきたことを鑑みした場合、このあたりでティプトリリーJr.記念賞を受賞するのは当然の流れだったのかもしれない。

性と暴力の問題や、常にとまどいを持つて描かれる同性愛など、ホールドマンと性にに関する研究は、本格的に行うならば一冊の書物もしくはそれ以上のヴォリュームとなることは間違いない。ホールドマンの作品には、他者の性体験を自らも体験することに執着する者が目立つ。こうした登場人物には、戦争とSFを書き綴り続けながらも自作の中で性に関する探究を飽く

ことなく続けてきた作者の姿が投影されているのかもしれない。

先ほど少し触れた『終わりになき平和』では、ソルジャー・ボーイという精神に感応して戦地で戦うロボットを十人一組となつて操る「機械士」たちのひとり、ジュリアンが主人公である。ソルジャー・ボーイを動かす時、機械士たちは精神的にまったく同一の存在となり、異なる性の同僚のすべての感覚と経験を共有することができる。ジュリアンの恋人のアメリアは、機械士たちのこうした感覚の共有がどのようなものであるか知ることにはこだわり、頭蓋にジャックを埋め込む危険な手術に踏み切る。ホールドマンは手術に至るまでのジュリアンとアメリア、さらには術後の二人の心の動きと関係を執拗に描き続ける。

こちらでも先ほど論じた『ヘミングウェイごっこ』では、主人公の英文学者ジョン・ベアドは時間の流れに不都合を起こす人間として、時を統べる管理者によつて何度も殺害されるが、その度に平行宇宙に存在する別の自分と同一化する。ある宇宙における人生で経験することは、平行するマルチヴァース^{ユニヴァース}それぞれ的人生において経験することと微妙に異なっている。ベアドはベトナム戦争で生殖器官の近辺あるいはそのものを負傷しているのだが、そのケガが彼の性器に与える影響が、各宇宙によつて違う。宇宙を移動するうちに、異なる宇宙で自分の肉体がどのように性的な刺激を感じるかは、彼の重大な関心事に

なつてゆく。

『擬態』においては、〈変わり子〉がすでに存在している人間をモデルにして自らの擬態を決定してゆく過程に注目できるように仕方なく、自分が姿を變じるモデルのセクシュアリティまでなぞることになる。擬態の結果として、様々な年齢・性別・身体的特徴・性的志向を持つ人々の性生活を追体験してゆく。他者の性体験を追体験することへの飽くなき欲望。ソルジャー・ボーイ、マルチヴァース、宇宙からの生命体、と様々な手管を弄して、ホールドマンの作品の登場人物たちはその欲望を充足させてゆく。

6

『擬態』とセクシュアリティ、あるいはジェンダーとの関係を考える際、この作品があざらし女の民話と深い関係があることは、一考に足る要素ではないかと思われる。というのは、あざらし女の民話が小説や映画などのかたちで語り直されるにあたり、語り手あるいは書き手のジェンダーが、作品の変奏のされ方に大きな影響を与えてきたように思われるからである。ティプトリー Jr. 記念賞の受賞の理由にあざらし女の民話とのつ

ながりが勘案されたとは考えにくい、性の問題を探求し続けるホールドマンがこの民話を自作の下敷きに選ぶにあたっては、これから論じる事柄の一部は多少なりともホールドマンの決定に影響を与えたと思われる。

ここでもう一度、あざらし女の民話そのものに立ち返ってみよう。現代の放浪の語り部ダンカン・ウィリアムズは、あざらし人間にまつわる民話の現実世界での働きについて、こう指摘している。海で亡くなった人があざらし人間の一族に加わったと考えることができれば、それは残された家族にとって大いなる救いになるであろう、と。海で命を落とす確率が一番高いのは漁師であろうが、島嶼部であれば女性や子どもも水の犠牲の例外ではない。あざらし人間の民話には、あざらし男にさらわれる人間の女たちの話がある。波頭に消えた赤ん坊が母親あざらしに救われて無事人間世界に帰還する話は、あざらし女の民話のパターンのひとつとされている。また、スコットランド島嶼部の複雑な歴史的背景を反映してか、あざらし人間は北方の人々、古くはヴァイキングと同一視されることもあった。冒頭で引用したトムスンの集めた民話の中には、ノルウェーの人間とあざらし人間を同一視する話がある（別の地域ではそうした民話のオチはあつまり否定されたりはするが）。こうしたあざらしに関する種々の民話は、個別にはなく様々に複合した

形で各地域に存在する。ここで断っておきたいのは、あざらしにまつわる民話にはいろいろなヴァリエーションがあるのは承知の上で、本論では男が語り手であろうあざらし女の物語に、主として注目して論を展開する、ということである。あざらしを殺して毛皮を剥ぎ、油を採る男たちが語る、獣姦の含みさえ感じ取れる民話。それはおそらく、あざらしに関する物語が生起する、最も根源的な場所ですら始まった民話と筆者には思えるからである。

ここからは、筆者の管見に入った限りで、『擬態』に先行するあざらし女の民話のいくつかのヴァリエーション、さらにそこから派生した小説や映画などを検証し、語り手や作家のジェンダーと民話の基本形の変奏の仕方の関係性について考察してゆくことにしよう。

あざらし狩りと毛皮が結びついた民話は、すでに見たようにほのめかすところがかかなり露骨で生々しい。よって、トムスンのように現場で生の物語を玉石混交で集めたのではなく、物語の出来を勘案しながら収録作品をセレクトしたような本では細部に変更が加えられ、物語の内容が微妙に調整されていたりする。王の娘を娶りに来るあざらし人間は金の馬車に乗ってやって来る超美男子、といった物語を十九世紀末にアイルランドで集めて出版したジェレマイア・カーティン（一八四〇～一九〇

六)は同じくアイルランドで、あざらし女の民話の基本形に近い、人間の男に嫁入りするあざらし女の民話を収集している。その話では、人間の姿をしたあざらし女を海に帰れなくするアイテムは毛皮ではなく、頭巾ということになっている(冒頭の物語では、フード付き外套になっていたことを想起すること)。そして毛皮が出てこない代わりに、男たちによって狩られたあざらしの亡骸を見てあざらし女が嘆き悲しむ、という場面がある。

人魚の民話を妖精学者のブリッグズがあざらし女の民話として分類していることはすでに述べたが、その人魚の物語では、異界の女に人間の言うことをきかす鍵となるアイテムは、人魚の櫛である。本論にとって重要なのは、人魚の櫛を手に入れば人間が知りえない情報を人魚から手に入れられる、と主人公の男に吹き込むのが年寄りの「母親」となっていることである。あざらしについて熟知した男のシル・キラの姿は、すでにこの物語にはない。なお、スコットランドの民間伝承学者ウォルター・トレイル・デニソンの仕事をもとにしてオークニー諸島民話集をまとめたトム・ミューアの著作(一九九八)には、あざらしの女を妻に迎えた男の話と、人魚と結婚した男の話が収められている。それらの話はどちらもブリッグズが分類して示したあざらし女の民話の二つの類型そのまま、おそらくソー

スは同一と思われる。ミューアのあざらし女と人魚の物語は、彼の民話集の中で慎重に間を開けて配されている。両者の物語のパターンはほぼ同一といつていいほど似かよっているので続けて読んで面白いわけはなく、ミューアが物語の配列に腐心したことがうかがわれる。

民話と並んで口承文化の代表的なものに伝承歌謡がある。口承文芸研究者、井川恵理によると、あざらし人間をめぐるバラッドの代表格「スール岩礁の灰色あざらし」が最初にシェットランドの島のひとつで収集されたのは一八五二年。このバラッドはさらに一八八〇年代にオークニーで収集され、二〇世紀の後半になつても現地のアマチュアや英語圏のプロのシンガーたちによつて歌い続けられた。物語は芸術家の手にすでに渡っているので生々しさは減じているが、細部の謎は謎のままであるなど民間伝承の素朴な残ちを残している。

このバラッドは、「ノルウェーの国に女がひとり／「坊やいい子だねんねしな／何処と知れぬおまえの父よ……」(井川恵理訳)と始まり、スコットランドの島嶼部とノルウェーとの強いつながりをほのめかすものとなっている。歌詞で歌われる物語では、人間の女のところにあざらし男が通ってくることになっており、登場人物の間の性別の割り振りは、あざらし女の民話の基本形とは逆転している。ただし、このあざらし男は自

分の子どもを生ませた女に結婚はしないが子どもは育てると言い渡し、身勝手な男と寛容な女の構図は、あざらし女の民話に通底する。なお、このあざらし男とその子どもは海に帰った後で人間に殺され、妻／母と悲しい再会をする。

民話に材を取り、それを創作に生かした文人たちとしては、十九世紀末にアイルランド文芸復興運動参加したW・B・イエイツやグレゴリー夫人らが有名だが、同じ時期にスコットランドでも民話を基盤として幻想味の強い作品を次々と生み出し作家がいた。フィオナ・マクラウドことウィリアム・シャープ（一八五五～一九〇五）である。編集者・作家として活躍したこの男性の文人は、一八九四年から女性主義すなわちフィオナ・マクラウドとして文筆活動を始めた。彼はウィリアム・シャープとしても作品を発表し続け、W・B・イエイツをはじめとする当時の有名文人たちとどちらの名前でも文通をした。自分がフィオナ・マクラウドであることは、終生明かしはしなかった。

シャープがマクラウド名義で作品を発表する際には何らかのかたちで女性性を強く意識していたに違いないが、日本ではアイルランド文学翻訳家としても名高い歌人の片山廣子（一八七八～一九五七）が、松村みね子名義でマクラウドの作品を日本語に移し変えている⁴。片山は、マクラウドの全集第二巻に収

められた二十の短編のうち、十二編を選んで話の順番を並べ替えた。彼女が翻訳の選集の冒頭に選んだ物語は「海豹」、すなわち「あざらし」である。女性の名前で翻案され、女性によって見出されて翻訳されたこの物語にはシール・キラが登場するが、その人物は毛皮と欲に目がくらんだ漁師ではなく、自らの犯した罪に懊悩する僧侶である。かつてあざらし人間の男が人間の女に罪を犯し（こちらでも配役の性別が逆転している）、魂のない子どもが生まれた。そのため、この僧侶コラムは弟子たちと共にそのあざらしを十字架にかけたのである。深く苦悩するコラムの目の前に、月光の波間にコラムが手をかけたあざらしとその妻が姿を現し、コラムに許しを与える。そして、コラムは傍らにいる魂がないはずの幼子に、キリストの姿を見出すのである。先のバラッドと同じように、海からやって来て殺されたあざらしは男になっているが、最後にはその妻となった人間も登場して波間に消え、あざらし女の民話の祖形の余波を残す。そして何より、あざらしを狩る男たちのご都合主義からおそらくは生じたあざらし人間たちの寛大さが、老僧の魂を救う神の恩寵へと変じるさまは、片山の訳文のすばらしさといえ、まっとうであまりに美しい。キリストと一体化した幼子は、自分に何を与えてくれるのか、というコラムの問いに対して答えるのだ。「まっとうき平和」と。

続いてトムスンがシール・キラーたちの物語の残滓を渉猟したその後の時代、二〇世紀の後半に目をやってみよう。(一言付け加えておくと、現代でもスコットランドであざらしを狩る男たちは存在する。ただし彼らの狩りは、漁業に被害を与える害獣駆除を目的として行なわれる。) 一九五七年、女性の作家があざらし女の民話を男の漁師からものの見事に篡奪してみせた。カナダ生まれのイギリス作家、ロザリー・K・フライがあざらしと少女の物語『フィオナの海』を出版したのである(原題は直訳すれば「西の島々の子ども」。アメリカ版では「ロン・モル・スケリーの秘密」。物語は、少女フィオナ・マッコンヴィルが転地療養のためにスコットランドの本土から祖父母のいる西方の島を訪れるところから始まる。フィオナの両親は本土で働いているが、祖父母と親族はかつてマッコンヴィル家が住んでいたロン・モル島のそばの島に残っている。フィオナにはジェイミーという名の弟がいたが、ゆりかごに入ったまま海に流されて行方不明となり、家族にとつての悲しい記憶となっている。ロン・モル島には今は誰も住んでいないが、その廃屋を訪れたフィオナは海に消えたはずのジェイミーにめぐり合う。あざらしの群れの長、通称「族の長」^{チフタン}が、ジェイミー

を育ててくれたのだ。祖父母が現在住んでいる家を本土の大家の都合で失うことになり、マッコンヴィル家の人々がロン・モル島での生活の再開を決意するのに合わせて、フィオナはジェイミーを取り戻す⁵⁾。

『フィオナの海』で物語の骨子を支えているのは、あざらしが人間の子どもに乳をやって育てることがある、という民話である。それに加えてフライは、あざらし女の民話も抜かりなく織り込んでいる。マッコンヴィル家には、祖先にあざらし女を妻とした者がいる、という話が伝わっている。だから、赤毛のはずのマッコンヴィル家にたまに黒毛の子どもが生まれるのだ、と(フィオナは赤毛だが、ジェイミーは黒毛)。この話を物語るのは、フィオナの祖父である。しかしフィオナの祖父の物語が収まっている物語は、ロザリーによってコントロールされている。マッコンヴィル家とあざらしたちとの間に深い関係があるという設定は、この物語の祖形である民話を明らかにすると同時に、マッコンヴィル家の人々があざらしを殺さない理由としても話の中で機能している。また、マッコンヴィル家に嫁入りしたあざらし女が海に帰った、という言及はない。ロン・モル島は、人が住んでいたころでも漁師の家が五、六軒の瘦せた土地の島だった、とされている。食べるものにも事欠く状態になったからこそ、人々は島を捨てたのだ。常識の範囲で考えて、

現実の世界にこういう島があれば、毛皮と油を手に入れるためにあざらしを手をくだすことがなかったとは考えにくい。だが、女性によって民話をベースにして紡ぎ出されたこの牧歌的な物語には、あざらし殺しは出てこない。女性作家フライは、あざらし女の民話を、少女を主人公とした血の臭いがまったくしないやさしい幻想譚に変じて見せたのだ。

この小説は、出版後三十年以上もたつてからアメリカで映画化される。プロデュースしたのはマギー・レンジとサラ・グリーンという二人の女性である。日本ではケルト・ブームの真只中の一八九六年に、神保町の岩波ホールで続く単館上映され、それに合わせて原作の翻訳が矢川澄子訳で緑がかつた青色が目に見え、鮮やかな装丁で出版された。映画の監督は男性で、ジョン・セイルズ。舞台はスコットランド島嶼部からアイルランドの北方、ミュージシャンのエンヤの故郷で有名なドネゴールの近辺に変更されている。この変更は、民話を文化財あるいは各地域固有の伝統が生んだ産物と考えた場合、かなり大きな意味を持つている。映画はほぼ原作に忠実だが、脚本家と監督があざらし民話についてよく勉強したことがうかがわれ、原作にない話が織り込まれたり、民話の細部が補われたりしている。本論にとって重要なのは、あざらし女の民話の祖形が視覚化されていること、そしてその民話が語られる場面もまた視覚化され

ていることだ。

フィオナの祖父ヒューが語るフィオナの家系コノリー家（原作のマッコンヴィルからアイルランド風に改名）に黒髪の子どもがたまに生まれる理由は、かつて祖先の一人があざらし女を妻に娶ったからである。彼が盗んだのは衣服ではなく、あざらしの毛皮だった。そして映画では、スーザン・リンチ扮するあざらし女^{セルキー}が妖艶にあざらしの毛皮を脱ぎ捨てる様子が、幻想味たつぷりに映像化されている。このセルキーは、毛皮を発見して海に帰ることになり、映画の中ではコノリー家に生まれたフィオナの叔父にあたる黒髪の男性によって、その顛末がしっかりと語られる。フィオナの祖父も、あざらしにまつわる民話をフィオナにして聞かせるが、その場面ではお婆さんのテス^{セルキー}が、迷信めいた話を夫がすることに終始渋い顔をする（なお、最終的に島に帰るといふ決断を下すのはこのお婆さんで、その決断によって、あざらしに育てられた子どもがいる、という現代の民話は真実の物語になつてしまう）。この映画では、民話を語るのは男なのである。なお、お爺さんヒューの話の中には海で溺れた漁師があざらしに救われる話もあるが、助けられる男はナイフで毛皮に四つの穴を開けたりはしない。

『フィオナの海』の原作の小説と映画をつなぐちょうど間の時期に、男性作家によるあざらし女小説が出版されている。

ウェールズ生まれの男性博物学者のロナルド・ロックリー（一九〇三〜二〇〇〇）が一九七四年に出版した『アイルランドのあざらし女』（原題『あざらし女 (Seal Woman)』がそれで、科学者が書いた奇想物語に類すると思われる珍品である（しかもなんと邦訳がある）。ロックリーは、一九三三年に英国最初の鳥類観測所を設立したことで著名な人物である。

主人公の語り手「わたし」は、第二次世界大戦中、中立を保っていたアイルランド沿岸に敵潜水艦が拠点を作らないように監視してまわる任務についていた。アイルランド西部のキルカラという海岸で、その近辺の領地を受け継いだ、両親がいない若い姉弟に語り手は出会う。そのうち姉のシアンは、祖母から聞かされた話を真に受け、あざらしたちと共に野生児のような生活を送っている。彼女は海の洞窟で拾われた赤子で、いずれ海の王子が彼女を迎えにやってくる、というのだ。語り手は弟ジェラルドを英国軍に従軍できるように世話をしているが、ジェラルドは戦死。シアンの面倒をみるという約束を果たすため、語り手はキルカラ海岸のそばで船を乗り捨て、海の王子と

して彼女の前に姿を現すことを決意する。暴風雨の中、キルカラ海岸そばで語り手は大きなあざらしに襲われるが、これをナイフで返り討ちにし、シアンの信頼を得ることに成功する。この後、語り手はシアンの愛を勝ち得て、文明世界とキルカラ海岸の間を往復しつつ彼女を文明社会に連れ帰ろうとするが、シアンは決してそれを承諾せず、あざらしたちと共に暮らすことを選ぶ。やがて二人の間には女兒が生まれ、語り手は娘をロンドンに連れ帰る。シアンが二人目の子どもを孕んでいたことを確信していた語り手は冬が去った後キルカラを訪れるが、そこには開発の手が入り、開発業者たちの部下たちによってあざらしは狩りたてられてしまっていた。語り手はシアンとかつて暮らした洞窟で女の人魚を見たという話を耳にするが、シアンの姿はもはやどこにも見つけることができなかった。

この物語は、あざらし女の民話に科学的な説明を付けて描こうとしており（それもサイエンス・フィクションの手法を使わずリアリズムで）、人間の女にあざらし女の役割をさせている。目の見えない雌あざらしが語り手を赤ん坊と勘違いして乳を飲まそうとする場面もあるが、これもあざらし女の民話の一変奏であろう。また、博物学者の手によるだけあって、海の動物の描写はリアリティックである。特に語り手とシアンが山の両生類やら海の魚類などを生でもりと食べる場面は、科学的

知識の裏づけがあるだけに生々しい。もっとも海の中で大型のあざらしに人間が襲われたとして、ナイフ一本で勝てるとは思えないが。なお、英国軍人によるアイルランド女性の箠絡は、近代アイルランド文学の伝統的なモチーフのひとつではあるがこの作品がその系譜に連なる作品として高く評価されたという話は寡聞にして知らない。

本論の主題に関係する部分では、シアンに海の王子の話を吹き込んだのが彼女の「祖母」とされていることがまず目につく。あざらし女の民話の変奏とされた人魚の民話で、年寄りの女が知恵袋の役目を担っていたことが思い出される。その一方で物語の終盤、あざらし狩りに参加した男の話を聞くかたちでシアンとあざらしの楽園が崩壊したことを語り手が知る展開は、特筆に価する。あざらしといっしょに泳いで暮らすような人間を除けば、あざらしにまつわる様々な事柄を知悉しているのは、あざらしを殺す男たちに違いないからである。

『フィオナの海』の映画化に前後する時期から現代に至るまでは、男性シール・マニアによるあざらし女の民話の祖形の掘り起こしがかなりしつかり行なわれている気配だ。特にスコットランドからの発信はアクティヴである。一九九八年にあざらし女の民話の本場、オークニー諸島民話集が出版されたことはすでに述べた。プロローグで紙幅をとって紹介したデイヴィッ

ド・トムスンの『海の人々』は一九九六年にカノンゲイト古典叢書の一冊として再版され、出版にあたつてはスコットランドのアーツ・カウンシルの助成を受けている。さらに二〇〇〇年には、ノーベル賞詩人のシェイマス・ヒーニーの序文を付して新しいエディションが出された。これも先ほど言及したダンカン・ウィリアムスンが収集したあざらし人間に関する民話は、『あざらし人間たちの物語』スコットランドの民話』として一九九二年にまとめて出版され、二〇〇五年に別の版が出された。そして、我々がホールドマンがあざらし女の民話を物語の支柱として『擬態』を世に問うたのが、二〇〇四年というわけなのである。

結語

最後に本論の内容をもう一度まとめなおしておく。スコットランド島嶼部やアイルランド西部には、あざらしにまつわる民話が多くある。そのうち、学問上ひとつの類型として認められている「あざらし女」の民話に着目し、その物語構造が、ジョー・ホールドマン作『擬態―カムフラージュ』の支柱となつていることを検証した。さらに、『擬態』には、イギリス諸島の辺境あるいはそこで語られる民話に関する言及や、その

ような民話にまつわるイメージが散りばめられていることを確認した。そのうち、物語の中心となる異星人に与えられた〈変わり子^{チェンジリング}〉という呼称は、人間世界の法則では説明がつかないような擬態をとることができる異星人の存在の可能性を、ある程度読者に納得させる働きをしているだろう。

また本論では、この作品がジェンダーや性のあり方を探求したSFおよびファンタジーに授与されるティプトリーJr.記念賞を受賞していることの意義を再評価する可能性を考察してみた。ホールドマンがキャリアを通じて、性を強く意識して作品を発表してきたのは明らかで、その積み重ねを考えれば、『擬態』のティプトリーJr.記念賞の受賞には妥当性がある。しかし『擬態』には性的・暴力的描写に関して、SFフェミニズムから生まれた同賞にそぐわないと見られても仕方がない側面がある。そこで、この作品とあざらし女の民話とのつながりに、ジェンダーや性の探求に関わる要素を見出そうと試みた。『擬態』は、あざらし女の民話を変奏した作品群のひとつとして捉えうる文学作品である。この民話が様々に変奏されるにあたっては、語り部や書き手のジェンダーに対する意識がその変奏のされ方に大きく影響してきたように思われる。この民話はあざらしを狩る男たちによって語られてきた身勝手な生々しい物語だったが、女性あるいは女性性を強く意識した語り手や作家たちによって、

その内容や細部が変更されたり、幻想味あふれる美しい作品に変じさせられた。しかしこのように毒を抜かれたあざらしの民話は、近年では再び男の語りを取り戻しつつある。そうした流れの中で『擬態』は、あざらし女の民話の祖形を洗練かつ複雑化したかたちで変奏しつつ、もともとの民話とは異なる男の欲望と身勝手さを描き出しているのである。

付記

本稿は、第三回日本SF評論賞（主催：日本SF作家クラブ、後援：早川書房）最終候補論文を削除修正したものである。学者にとつて、論文はいったん投稿してしまえばそれをコントロールすることは能わぬものなので、同賞に関して思うところは特にない。十年以上前のものであるの本来は加筆してアッブデートすべきところだが、本稿の目的の一つは『擬態』が書かれた意義をゼロ年代にリアルタイムで考察することであつたので、そのような作業はしていない。とはいえ、中野善夫氏によるマクラウドの新訳『ウラドの夢』（国書刊行会）が出た今、それに関わる部分に手を加えないでいるのは辛かった。また、ウェブ上の文書はアクセスしなおして、現在閲覧できるものを参考文献に挙げてある。

『擬態』が舞台となる二〇一九年が過去となる前に本稿が日の目を見るに至るにあたっては、岡和田晃氏に大変お世話になった。篤く御礼申し上げる。本稿が未来のための何らかの批評的営為に対してわずかにでも役に立つならば、それは筆者にとって無上の喜びである。

注

1「変わり子」は海兵隊に入隊する。残念ながら米海軍特殊部隊（シー／ SEAL）ではない。

2 ホールドマンがアイルランドの民話にそれなりに興味を持っていることは、彼のホームページの旅行記の一部に見て取れる。ホールドマンは二〇〇〇年の七月二十日から八月十日まで、アイルランド・スコットランドとアメリカの大学間の合同企画の旅行ツアーに参加し、アイルランドの主に西部から南西部の景勝地を訪れている。八月一日に到着したキラニーに関する記述では、十九世紀末に自らも劇作をしつつアイルランド文芸復興運動をパトロンとして支えたオーガスタ・グレゴリー夫人の屋敷があったクール・パークのそばを訪れたことに触れ、グレゴリー夫人のプロフィールをひと通り紹介している。そしてその記述は、グレゴリー夫人がパトロンにして芸術家であると同時に、勤勉な民俗学者（assiduous folklorist）であった、という言葉でしめくくられている。

3 ホールドマン、『擬態』の訳書より。以下、テキストからの引用は訳書から行うが、当該箇所は全て原書でも検証した。

4『海豹』が最初に発表されたのが一九二二年、『心の花』誌上だった。小川未明（一八八二—一九六一）の『赤い蠟燭と人魚』の出版が一九二一年。小川には、人間に変じることはないものの擬人化されたあざらしの登場する「月とあざらし」もある。この時期の日本の文人たちが、イギリス島嶼的なイマジネーションを共有していたことがうかがわれる。

5 西に向かったフィオナは、あざらし民話の本場の北方のオークニーやシェトランド諸島ではなく、おそらくヘブリディーズ諸島のうちの島のひとつに向かったと思われる。ただしこちらはアイルランドに近いこともあって、ゲール語文化が色濃く残る地域である。フィオナの祖父母は本土の地主の都合によって家を離れなければならないが、このあたりの展開には、作品を執筆するにあたって、フライが周辺の国々の都合に翻弄されてきたスコットランドの島々の歴史を一念に調査した様子がうかがわれる。スコットランドの島々の多くは元々ノルウェー領であったが、スコットランド本土のクランの支配下となり、十九世紀にはハイランド・クリアランスと呼ばれる大規模牧羊の導入によって、多くの島民が島を追われた。この物語には、スコットランド本土と島嶼部の対立軸が導入されているのだ。

6 監督のセイルズは、この設定の変更を「アイルランドの文学や音楽のテーマの多くが「喪失」を扱っているから」と述べている。セイルズのアイルランド芸術論については、参照したインタビュー記事に具体的な作品名が挙げられていないので論じることが難しい。確かなのは、この舞台変更によって『フィオナの海』の映画化に際してスコットランドの島嶼部は、自らの文化を発信あるいは再確認する大きな機会を喪失した。

参考文献

井川恵理、「『The Grey Silkie of Sùle Skerry』(チャイルド・バラッド一三番)にみるスコットランドのあざらしびと伝説」、『駿河台英文学』第一号(一九八七年)、二五〜四三頁。

――、「北からのイギリス―あざらし・石油・グリーンピース」、『へるめす』第五九号(一九九六年)、一三六〜一五〇頁。

井村君江、解説、フィオナ・マクラウド、『かなしき女王―ケルト幻想作品集』、松村みね子訳、沖積舎、一九八九年、二七五―三一四頁。

小川未明、『小川未明童話集―赤いろうそくと人魚』、一九四六年、新潮文庫、二〇〇四年。

カーティン、ジェレマイア、『アイルランドの神話と民話』、安達正・先川暢郎訳、彩流社、二〇〇四年。

木村正俊・中尾正史編、『スコットランド文化事典』原書房、二〇〇六年。

グラッシー、ヘンリー編、『アイルランドの民話』、大澤正佳・大澤薫訳、青土社、一九八八年。

セイルズ、ジョン、「フィオナの海」について、『Equipe de Cinema No.119(一九九六年)、十〜十一頁。

フィオナ、『海からのメッセージ―スコットランドのアザラシと音楽家の物語』、熊谷鉦司訳、ぶんけい、一九九九年。

『フィオナの海』、ジョン・セイルズ監督、アミューズビデオ、一九九四年。

フライ、ロザリー・K、『フィオナの海』、矢川澄子訳、集英社、一九九六年。

ブリッグズ、キャサリン、『イギリスの妖精―フォークロアと文学』、石井美樹子・山内玲子訳、筑摩書房、一九九一年。

ホールドマン、ジョー、『終わりのなき戦い』、風見潤訳、早川書房、一九八五年。

――、『終わりのなき平和』、中原尚哉訳、創元SF文庫、一九九九年。

――、『擬態―カムフラージュ』、金子司訳、早川書房、二〇〇七年。

――、『さらば ふるさとの惑星』、矢野徹訳、集英社、一九八二年。

――、『ヘミングウェイごっこ』、大森望訳、福武書店、一九九一年。

(ハヤカワ文庫、二〇〇九年)。

マクラウド、フィオナ、『かなしき女王―ケルト幻想作品集』、松村みね子訳、ちくま文庫、二〇〇五年。

マコーリイ、ポール・J、『フェアリー・ランド』、嶋田洋一訳、ハヤカワ文庫、二〇〇六年。

ミユア、トム、『人魚と結婚した男―オークニー諸島民話集』、東浦義雄・三村美知子訳、あるば書房、二〇〇四年。

ロックリー、ロナルド、『アイルランドのおぞらし女』、佐藤亮一訳、シャパン・パブリッシングズ、一九七六年。

Briggs, Katharine M. *A Dictionary of British Folk-Tales in the English Language*. 2 Vols. Routledge, 1970.

Haldeman, Joe. *Camouflage*. Ace Books, 2004.

——, "Travel, Ireland 2000." *Joe Haldeman*, EarthLink Inc., July 20–22, 2000, www.joehaldeman.com/diary/ireland-2000. Accessed Apr. 6, 2018.

McBride, Margaret. "Camouflage by Joe Haldeman (Ace Books, 2004)." *James Tiptree, Jr. Literary Award*. The James Tiptree, Jr. Literary Council, tiptree.org/award/2004-james-tiptree-jr-award. Accessed Apr. 6, 2018.

Sharp, William. *William Sharp (Fiona Macleod): A Memoir*. Compiled by Elizabeth A. Sharp. 1912. UP of the Pacific, 2004.

Thomson, David. *The People of the Sea: Celtic Tales of the Sea-Folk*. 1954.

Cannongate Classics, 1996.

Williamson, Duncan. *Tales of the Seal People: Scottish Folk Tales*. Interlink, 2005.